

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業
国際交流拠点形成事業)

事業名：第13回浜田こどもアンデパンダン展

事業者名：財団法人浜田市教育文化振興事業団

(浜田市世界こども美術館)

住所：島根県浜田市黒川町4175番地

(島根県浜田市野原町859-1)

TEL：0855-23-8451

FAX：0855-23-8452

HPアドレス：<http://hamada-kodomo.art.coocan.jp/>



連携事業者名：ラトリエ(フランス)

ヘルマンこども博物館(スロベニア)

ギリシアこども美術館(ギリシア)

パパロテこども博物館(メキシコ)

リトルアート(ドイツ) 他

会場：浜田市世界こども美術館

事業期間：平成21年10月1日～平成22年3月10日

1. 館の使命と本事業の関係

当館は、子どもたちに美術鑑賞とワークショップの機会を与えること、及び海外との交流を図るという使命をもつ。子どもたちが自らの作品を展覧会に出品するとともに、ワークショップに参加し、海外の指導者のもと言葉の壁をこえた交流を体験することができる本事業は館の使命を実現に導くことのできる事業であった。

2. 企画内容

①事業目的

色や構図、材質やテーマなど、それぞれのお国柄が色濃く反映された作品を鑑賞し、海外の児童美術教育者と活動を共にすることで、異文化理解を深め、これからの国際社会を担っていく子どもたちに刺激を与えることを目的として実施した。また子どもたちの自由な発想から生み出される作品の数々を通して、今日の美術教育の動向と新たな可能性を示唆するとともに、当館が世界の各施設と連携することで、児童美術を総合的に支援・研究する中核施設として認知されることも目的とした。

②事業概要

本事業は、《ワークショップ》と《展覧会》の2つの部門で構成した。児童美術の先進的な活動を行っている海外の組織(フランス・スロベニア)から指導者を招き、浜田の子どもたちを対象にワークショップを開催。できあがった作品は『第13回浜田こどもアンデパンダン展』に出品し、実践を広く紹介した。展覧会では世界各国及び浜田市内から力作を募った。会期終了後には、観覧した浜田の子どもたちから出品者へ手紙を送付し、海外の出品者とも交流を進めていった。世界の諸施設と連携をはかり実施することで、当館が質の高いプログラムを実施できる企画力を身につけた、地域における児童美術の専門施設としての意義を明確にするよう努めた。

●展覧会には海外15カ国から84点。浜田の部では306点。交流ワークショップで誕生した作品16点を加え、合計406点の展覧会として開催した。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

実施時期	計画事項		
	①調査・打ち合わせ	②ワークショップ・展覧会	③記録集作成
10月5日	現地調査・打ち合わせ	ワークショップ準備	
10月24日～		ワークショップ実施 (11回・11日間)	
11月上旬～		展覧会準備	
1月16日～		アンデパンダン展開催	
2月23日			記録集発行

●ワークショップ

フランス指導者ワークショップ 平成21年10月24日(土)～10月30日(金)
5回のワークショップを実施

⇒《マティスに挑戦!》(2回)・《モナリザに挑戦!》《ミロに挑戦!》(2回)

スロベニア指導者ワークショップ 平成21年10月31日(土)～11月6日(金)
6回のワークショップを実施

⇒《パステル動物誕生!》《スロベニアのハートづくりに挑戦!》《スロベニアの面づくりに挑戦!》《ハチづくりに挑戦!》《ハチの巣のパネルづくり》(2回)

●展覧会『第13回浜田こどもアンデパンダン展』

会期：平成22年1月16日(土)～2月14日(日)

“浜田の子どもたち”と“海外の子どもたち”が参加する無審査・無賞の児童美術展。どの作品にも“夢”や“希望”がたっぷりと詰め込まれており、みる者をひきつけるパワーにあふれていました。



▲絵本画家リラ・プラップ氏と活動



▲ワークショップに参加した子どもたちが展覧会の鑑賞にやってきました。

(2) 参加者の数

●ワークショップ参加者 675名(保護者含む)

●展覧会観覧者 大人 766名 小中 493名(招待者含む) 未就学児 337名

参加者人数 延べ 2,253 人

内 訳： 幼児～一般

(3) 事業により作成した印刷物等

「ポスター」・「チラシ」・「国際交流ワークショップ活動の記録集」・「第13回浜田こどもアンデパンダン展 出品作品集CD」

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞記事



▲ 山陰中央新報（石見版）平成21年11月15日 朝刊



▲山陰中央新報（石見版）平成22年1月28日 朝刊

その他、中国新聞（島根版）平成22年1月25日 朝刊

○テレビ、関連誌等

NHK島根「しまねっと」平成21年10月31日 夕方のニュース 3分程度

NHK島根「ひるまえしまねっと」平成22年1月21日

アートの特集コーナーで紹介

いわみひゃっこるネット、平成22年1月の水曜日の定期放送

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

子どもたちにとって、工夫が凝らされた様々な立体作品を鑑賞することは、ものづくりの原点を見直すことにつながったようだ。来館者からも「子どもたちの作品に感動した」「発想がすごい!」「身近なゴミになってしまうようなものを、上手に使って感心した」との声が寄せられており、本展を通して、作ることの素晴らしさと、子どもたちの感性の豊かさを存分に伝えることができたと考える。また、世界各国の児童画を鑑賞することは、その国の背景を読み取ることにつながり、異文化理解を深めるきっかけとなったようだ。観覧者は下記のような意見を残している（観覧者の感想を抜粋し掲載した）。

- 児童画は国が違って、同じような作品だと思っていたが、国によって作風がかなり異なるので、文化、風土、環境そして教育が与える影響があるのだと感じた。
- 国によって子どもたちの絵にはっきり特徴が出ていてとても興味深かった。
- 海外の子どもたちの作品は生活習慣によって感じ方も違い、表現の仕方が日本の子どもたちと違い面白い。
- 日本の子どもたちと外国の子どもたちの感性の違いを感じた。環境や文化が違うとこのような違いが出ることを知った。どちらが良い悪いではなく、子どもたちの夢をどんどん膨らませてほしい。

子どもの実体験に基づいた素朴で素直な表現は万国共通である。だが、子どもたちがおかれている生活環境が違えば表現にも随分違いが出てくることを鑑賞者が感じ取っていることがわかる。鑑賞を通して異文化理解につながったのではなかろうか。

ワークショップの実施にあたっては、市内の学校や幼稚園・保育園等と連携し、現場の教諭とともに打ち合わせを重ねながら、地域の多数の方々の参加を得ることができた。“アートは世界の共通語”というフレーズの通り、言葉の壁を乗り越えた充実した活動からは、国や人種などにとらわれず“人”と“人”との相互理解と出会いの大切さを参加者それぞれが実感することにつながった。作品制作を行う過程においては、参加者にとって言葉の壁は関係なく、“つくる”という行為によってコミュニケーションを図ることができた。一方、言葉の大切さも痛感させられ、言葉での意思疎通の重要さも体感することができたようだ。海外からの指導者による創作活動は、これまでに当館で実施したことのない内容（恐らく日本では取り組まれたことのない内容）であり、参加者を大いに刺激し、表現活動の幅を広げさせてくれた。海外の指導者を通して他文化を知り、違いを認識し、他者を思いやる気持ちの芽生えにつながったであろう。活動を終えた子どもたちは、達成感と充実感をもち、また地域全体が国際理解を深めていったことは、美術館だけでなく、地域全体の地域力を高める結果となったと考える。

今後の課題は、この展覧会を継続的に実施続けることにある。本展の継続開催は、児童美術における表現の変遷等を記録・研究することにもつながるものと認識している。この記録の積み重ねは、児童美術表現の過去と未来をつなぐ重要な資料になることだろう。また、今後も海外の先進的な活動を紹介するワークショップを開催することができるような枠組みを整備・構築していくことも必要だと考える。